

高校生のための論文指導

- テーマの選定から論証の仕方まで -

斎藤 祐 (中央大学杉並高等学校教諭)

はじめに

本校で3年生を対象とした論文指導を始めてから今年度(2006年度)で3年目となる。生徒自らが研究テーマを設定し、必要な文献を収集・精査した上で、4,000字~6,000字程度(400字詰め原稿用紙10~15枚)にまとめるというものだ。3年進級時の春休みにテーマを選定し、年度初頭に自分の研究テーマを確定、それからの約半年間が執筆期間となる。

本校は在校生が約1,000名の共学校⁽¹⁾であり、卒業生の9割以上が内部推薦で中央大学へと進学する。そのような環境条件を踏まえ、時間をかけて一つの課題に取り組む姿勢を養ってもらいたいと我々は考えている。また、書き言葉として通用するひとまとまりの文章執筆は、大学進学以降必須のスキルとなっている。論文作成を通して、情報収集力、日本語の運用能力をいかに高められるか、以下にその授業実践の報告を、反省点と見えてきた課題を織り交ぜながらまとめてみたい。

第1章 授業背景と指導理念

(1) メディア・リテラシーと論文指導の位置づけ

本校の国語教育、特に現代文の分野においては、文学教材の読解を中心とした「文学教育」から、メディアを対象とした論説文読解を中心とした「メディア教育」へとその軸がシフトしつつある。3年次必修授業の「現代文」は「メディア・リテラシー」へと名称変更され、より時代に即した言語運用能力の育成を目標に掲げている。

高度情報化社会と呼ばれる現代において、さまざまな形態で流布する情報の中から、情報の信憑性や蓋然性の高いものを抽出する能力が求められており、「メディア・リテラシー」すなわち「情報を批判的に読み解く能力」の育成は、国語の領域において特にその重要性が自覚されなければならない。しかし、夥しい情報が与えられるだけでは上記の能力を獲得することは難しい。あくまでもテキストを丁寧に読み込むこと、主張の妥当性を検討すること、他の論者の主張と照らし合わせることを踏まえつつ、自己の価値観に沿って論理的な再構築を試みる必要がある。3年次における論文指導は、そのような理念のもとに設定されている。

(2) 指導テキスト

指導テキストは戸田山和久『論文の教室 - レポートから卒論まで』(NHKブックス、2002年)を使用している。論文指導を始めた当時は、参考資料として生徒に推薦するにとどめていたが、昨年度より該当学年生徒に本書の購入を義務づけ、折に触れ参照しながら授業を展開している。「論文の書き方」をテーマとした書籍は世の中に数えきれないほどあるが、文章を執筆する上での確な「段取り」を提示しながら、平易かつ通俗的な文体で展開されている本書が現時点では最も利用価値が高いと思われる。ただ、執筆者が大学教員であり読者対象が大学生であるので、高校生が使えるようにするには教員が適宜解釈することが必要ではある。

(3)「論文」とは何か

「論文」を書くといっても、大学の研究者が書くような学術論文の執筆を目指しているわけではもちろんない。あるテーマについて問題を見つけ、自ら立てた問題に答えるという形式で、他者の書いた先行研究を踏まえながら自分の意見を主張するというのが、本校における「論文」の定義である。ちなみに、戸田山和久のテキストにおいて「論文」とは以下のように簡潔に定義されている。

(論文とは - 引用者注)問いに対して明確な答えを主張し、その主張を論証するための文章である。⁽²⁾

論文において大切なことは「主張の妥当性」ではなく「論証の妥当性」である。主張の説得力を論理的に高めるための言語行為として「論証」はあり、反例によって覆されないような「妥当な論証形式」を踏まえなければならない⁽³⁾。約半年間の執筆期間があるにも関わらず最大で6,000字という字数制限を行っているのは、厳密に言えばセンテンスごとにその妥当性を検証するためであり、より豊富な文献を踏まえて蓋然性の高い論証を行うためである。

第2章 授業の実際的な展開

(1) テーマの選定

前年度までは生徒各自に自由なテーマ設定を課し、提出された題目を担当教員が確認するという方法を取っていたが、その方法では生徒が所属するクラブ活動のスポーツを対象とするものや⁽⁴⁾、音楽やエンターテインメントなど趣味的な世界を論じようとする⁽⁵⁾卑近で短絡的なテーマを排除することができなかった。そこで今年度は2年次春休みの課題として次のようなものを指示した。

ちくま新書、講談社ブルーバックス、NHKブックスの中から、自分の研究テーマに関連する書籍を1冊選び、その内容の構成図「問いのフィールド」⁽⁶⁾を作成する。
ただし、書籍は巻末に「注」や「参考文献」が示されているものに限る。

の出版社の指定は、本校図書室に上記のシリーズが刊行以来すべて揃っていることと、現代的な社会事象を考える上で示唆に富むテーマを扱っているものが上記シリーズに数多くあると判断したためである。また、の条件付けは、昨今の新書出版状況において「語り下ろし」と言われる口語筆記の形態をとった書籍が少なくなく、生徒が情報の探索やテーマを掘り下げる上で参考にならないものを手に取らないよう配慮したものである。

年度が改まった3年次の4月に課題が出揃い、その結果に基づいて各自の研究論文の題目、及び目標規定文の執筆を行った。ほとんどの生徒が、春休みの課題と関連づけたテーマを選定したが、自分が読んだ書籍とは別のテーマでの執筆を希望する生徒、また担当教員の判断で執筆困難とされた生徒⁽⁷⁾は、再度書籍の探索をし、5月までにテーマが出揃った。ただし、前述したスポーツや娯楽をテーマとするものは激減したが、最大6,000字という分量では扱いきれない壮大なものが含まれているのが難点である。

次年度以降、テーマ探索の書籍を具体的に指定する⁽⁸⁾等の工夫が必要だろう。

(2) アウトラインの作成

テーマを設定し、目標規定文を執筆した者は、アウトラインの作成に取りかかる。「アウトライン」は「目次」と違って、あくまでも執筆者が執筆の戦略を立てるために作成するものである。まずはA4用紙1枚程度の簡単な「項目アウトライン」を作り、資料や疑問点を整理しながら適宜変更を加えていく。この課程で、設定したテーマの妥当性が浮き彫りとなり、テーマの絞り込みや基本的枠組みそのものの変更を余儀なくされる。大まかな章立て、収集が必要な資料等の具体的なリストが出来てきたら、それぞれの章を簡単に文字化した「文アウトライン」を作成する。

アウトラインを作るというのは、大きくて漠然とした問題を、それぞれ手持ちの材料で答えを出せるいくつかの比較的小さなサブ問題に分け、そのサブ問題に答えると、最初の大きな問題に答えたことになる、という具合に問題を整理・配置することに他ならない。⁽⁹⁾

「アウトライン」の重要性はどれほど強調しても足りないくらいだが、ある程度の本文を実際に執筆してみるまでそれに気づけない生徒も少なくない。「アウトライン」は執筆者に、何を調べ、何を考えなければならないのかを教えてくれる道標である。粗略なアウトラインで執筆に入る者は、地図を持たずに旅に出かける者と同じで、質の高いものを結局作れないまま終わる。

その対策として、テーマと目標規定文が出来た時点で一度口頭発表の機会を設ける必要がある。まだ何も調べていない段階で、これから述べようとする主張だけを公開したとき、課題設定と導こうとする結論の蓋然性が測れると同時に、論証の方向性が見えてくるだろう。

(3) パラグラフへの展開

『論文の教室』では、「アウトライン パラグラフ 論文」という執筆の流れが明確にされている。つまり、箇条書きで項目を並べただけの簡単な「項目アウトライン」から始まって、アウトラインの各項目を短い文の形にした「文アウトライン」を作成し、さらに文アウトラインで作成した文を「トピック・センテンス」としてパラグラフを作り、それを基に補強や注釈を加えて論文の形に仕上げていくというものだ。ここで言うパラグラフとは、文章を書き上げてから読みやすいように区切った「段落」のことではなく、あくまでも一つの事柄を述べるために組み立てられた「論文を作り上げるための最小構成単位」を意味している。パラグラフにおいて中心的な役割を果たす「一つの事柄」(=命題)が「トピック・センテンス」である。

パラグラフを組み立てつつ、アウトラインに変更を加え、アウトラインを可塑的に組み替えながら具体的な論証を重ねていく。文章を執筆しつつアウトラインを補正し、補正したアウトラインをもとに新たな章を執筆する。この「自己検証」の作業こそが、本課題設定のうちで最も重要な部分であるのは言うまでもない。夏期休業中の課題として、任意の一節(400字詰め原稿用紙3枚程度)の提出を課し、9月に出されたものの添削を経て、11月の提出日までが上記の作業に没頭する、純粋な執筆期間となる。

(4) 音読による文章添削

9月に提出された夏期休業中の課題の時点で、それぞれのセンテンスに不備が多々ある。そこで、書いたものをクラス・メイトに音読して聞かせ、相手から質問を受けるといった時間を設けた。主語のない文や述語の抜けている文、主述が対応していない文など形式的なもの、あるいは唐突な話題提起や情報の信憑性などが課題項目として指摘されるのである。論文の骨子に関わるようなものから文法的な齟齬まで、自身の文章の「傷」が自覚できるという点では有効な方法だと言える。

ここ数年、一文のなかに整合性のない文章を書く生徒が少なくない。例えば「この制度の問題点は～」で書き出したのに文末が「という点が問題である」になっていたり、「なぜならば」で始まった文が「である」で終わっていたりする。他にも主語が明示されない文や体言止め、「～してはなく」のような口語の濫用など、基礎的な文章執筆力の育成は課題が多い。センテンスを短く区切り、接続詞で論理性を明示していくことを、1年次から徹底させる必要があるだろう。

(5) 口頭発表

提出された論文をもとに、今度は各クラスでプレゼンテーションを行う。書き上げた自身の論文をもとに、プレゼンテーション用のレジュメを作成する。今年度の場合、題目が出揃った時点でクラス・メイトの題目一覧は配布したが、それぞれがどのような観点からどのような考察を行ったかは明示していなかったため、発表者は自身の題目と題目設定の理由、分析の概要、考察を1人3分程度でまとめ、自分の研究テーマについてまったく基礎知識がない人でも耳を傾けられるようにした。発表後には質疑応答の時間を設け、発表者が扱ったテーマの具体的な事例を紹介したり、主張への反論を受けたりできる機会とした。議論ののち、発表を聞く側の生徒たちは、発表者一人ひとりに対してコメントを綴り、記名入りで本人に渡る形式を取った。

第3章 今後の展望

ただ書くだけならば高校生でも20,000字(400字詰め原稿用紙で50枚)は書ける。しかし、自分の手がけた事象のどこに問題の本質があるのかが不明確で、かつ他人を説得可能な程度の筋道立てた論証ができない者に「量」だけ膨大なものを書かせても意味がないだろう。将来的に、4,000字以上とされている字数制限を6,000字程度に引き上げることはあっても、それ以上は「質」の低下を招くだけと思われる。4,000字~6,000字というのは何かを書こうとする上で対象となるテーマを「書ききれぬ」分量ではない。問題を絞り込んで書かなければ内容が拡散してしまうのである。

本校での論文指導が丸3年経ったのを機に、この形を踏襲したまま内容の面において一層の充実を図っていく必要がある。3年次の論文執筆を高校国語教育の集大成と位置づけ、1年次から3年次での論文執筆を見据え、その到達点を意識づけながら読解や文章作成の技術を指導していくつもりである。具体的には教科書に掲載されている評論文を100字や200字の字数制限で要約する、学習したテキストを適宜引用しつつ400字~800字で論理構築をする、小説作品を設定された観点から批評するなど、「手」と「頭」を動かす訓練を徹底していかねばならないだろう。

「メディア・リテラシー」の育成とは、情報処理能力を高めることではあるまい。むしろ異なった事象の相同性に着目しながら問題の構造をつかみ、論理へと展開していく能力をこそ鍛えなければならぬ。デジタル礼賛の時代にあって、求められているのはあくまでアナログな意味での創造性と構築力なのである。

【注】

- (1) 本校の入試形態は「一般入試」「一般公募推薦入試」「帰国生入試」の3形態があるが、男女ごとの定員制は設けていない。2006年度時点での男女比はほぼ1:1である。
- (2) 戸田山和久『論文の教室』p.12
- (3) 前掲書第6章参照
- (4) 「バスケットボールの勝利学」「マイナースポーツとしてのバドミントン」など
- (5) 「現代日本ロックに必要なものは何か」「J-POPの秘密」など
- (6) 『論文の教室』p.127 を参考にしたもの。
- (7) 高橋哲哉『靖国』、鈴木邦男『国家公安警察の秘密』(ともにちくま新書)など、イデオロギー色の強すぎるもの、主義主張に偏りのあるものを課題書籍に選んだ者。
- (8) 「AERA MOOK」の『学がわかる』シリーズの巻末参考文献リストの利用や、教員が選んだ新書リスト作成、またはWeb上のサイト「新書マップ」(<http://shinshomap.info/search.php>)活用などが考えられる。
- (9) 戸田山前掲書 p.115

【参考文献】

- 木下 是雄(1990)『レポートの組み立て方』(ちくまライブラリー36)
 戸田山和久(2002)『論文の教室 - レポートから卒論まで』(NHKブックス)
 山内 志朗(2001)『ぎりぎり合格への論文マニュアル』(平凡社新書)